2020年度 明治大学
【商 学 部】
解答時間　60分
配点　100点

り

日 本 史 B 問 題

はじめに，これを読むこと。

（注意事項）

1. この問題用紙は，11ページある。
2. これは，日本史Bの問題である。解答用紙が出願の時に選択した科目のものであるかどうかを確認のうえ，解答すること。
3. 解答用紙の所定の欄に，必ず氏名を記入すること。
4. 解答用紙には受験番号が印刷されているので，受験票と照合して受験番号が正しいかどうか確認すること。
5. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
6. 解答は，必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入しなさい。
7. 訂正は消しゴムできれいに消し，消しくずを残さないこと。
8. 解答用紙は，絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
9. 文字は一点一画まで正確に書くこと。
10. **解答用紙は持ちかえらないこと。**
11. この問題用紙は必ず持ちかえること。
12. 試験時間は60分である。
13. マークの記入例

良い例	悪 い 例
●	◎ ⊗ ○

〔Ⅰ〕 以下の文章は、古代・中世の日本の旅について記したものである。文章内におけるａ～ｅの【　　】に入る最も適切な語句を①～⑤から選び、マークしなさい。また、 1 ～ 5 の中に入る最も適切な語句を記しなさい。

古代における天皇の行旅についてみると、大化以後の離宮・行宮には、摂津の小郡・大郡・味経、大和の川原・小墾田・板蓋・岡本・両槻・吉野・島などがあり、律令体制を固めたことで知られる持統天皇は吉野宮行幸を頻繁に行った。やや遠方の行幸では、孝徳天皇による有馬温湯、斉明天皇の紀温湯があったとされる。皇族を重用して皇親政治を強化した天武天皇は信濃の束間温湯に行宮を構え、また持統天皇は紀伊・伊勢の行幸があったのであるが、このときには近江・美濃・尾張・三河・遠江の諸国から騎士・荷丁、造行宮の仕丁が徴発された。701年には天武・持統天皇の孫である 1 天皇(683～707)の紀伊国の武漏温泉への行幸があった。717年に、草壁皇子の皇女であった 2 天皇(680～748)は、近江の淡海をめぐったのちに美濃に行幸し、多度山の美泉を見物した。行在所では、伯耆・備後・讃岐以東の諸国の国司が、それぞれの国の歌と舞、また相模・信濃・越中以西の諸国の国司は雑技を奏したという。

天皇の乗物は輿であった。765年に称徳天皇が紀伊に行幸した際の行列、すなわち鹵簿の編成は、御前次第司長官と同次官をはじめ陪従者は多数におよんだ。奈良時代の行幸は建前では見物や保養であったが、叙位や租庸調の免除、また大赦が行われており、天皇の権威を知らしめる政治的な意図もあった。

平安時代になると、遠方への行幸はなされず、京近郊への行幸や狩猟が頻繁に行われるようになった。813年に嵯峨天皇が交野に遊猟して山崎駅を行宮とした際には、天皇の輿を担ぐ役割などを果たした駕輿丁や護衛役の左右衛士らが供奉した。

皇族や貴族は、天皇の行幸に同行するだけにとどまらず、私的な行旅に出かけることもあった。『万葉集』には、聖武天皇に仕えた宮廷歌人で、行幸供奉の作品や優美な自然を詠んだことで知られる 3 (生没年不詳)の「伊予の温泉に至りて作れる歌」や「不尽山を望める歌」、柿本人麻呂の「羇旅歌」などが収められ

ている。平安時代の皇族や貴族は、畿内に別業をもつものもおり、しばしば訪れていた。藤原頼通の宇治平等院は別業を寺院としたものである。

10世紀以降の律令体制の衰退・崩壊期には地方政治の混乱もあり、行旅には多くの困難がともなった。交通・輸送の大きな障害として、海賊や盗賊の横行があった。土佐国司の任を終えた紀貫之が京に帰るまでの紀行である『土佐日記』によると、934年12月21日に土佐国府を出発してから50日ほど経った翌年2月16日に京に到着している。紀貫之は、安全を優先したため風波などの気象条件が悪いときに途中の津に滞在し、さらに海賊を警戒していた。10世紀ごろから京をはじめ地方には群盗、瀬戸内海や南海には海賊が出没するようになっていたのである。10世紀に活躍した海賊としては、a【① 隠岐　② 伊予　③ 安芸　④ 備前　⑤ 長門】の官人から海賊の棟梁になった藤原純友が有名である。

『更級日記』は、上総国の国司の二等官であった上総b【① 判官　② 輔　③ 少領　④ 助　⑤ 介】の菅原孝標の女が、任期を終えた父らとともに帰京したときのことなどを回想した紀行である。難所の一つであった足柄山を越えて、富士川、大井川、そして天竜川を渡り、浜名湖を舟で渡ったのち、三関の一つである東山道美濃国のc【① 鈴鹿関　② 愛発関　③ 不破関　④逢坂関　⑤箱根関】を越えて近江国に入り、上総を出発してから90日ほどを要して京に到着した。作中では道中の恐ろしさや通行に難儀したことなどが記されている。このことは、武士が勃興する契機となった律令体制の衰退期における社会不安の世相を反映していたと言えよう。

一方で農民の場合には、本籍地を自由に離れて旅に出ることはほとんどなかった。ただし、手工業の発達と交換経済の発展によって行商人がみられるようになっていた。奈良時代以降には京の東西市をはじめ、各地で市が開かれていた。

次に、鎌倉時代の武士の旅についてみることにしたい。御家人の番役の一つで、蒙古軍の襲来以降、大宰府から博多湾の警備を任務とした [4] は、鎮西9カ国で警備地区を分担した。九州に所領をもつ御家人らは、番役を果たすために京都、鎌倉、そして大宰府や博多などを往来した。鎌倉幕府は、御家人らの交通を考慮して街道を整備し、関東では鎌倉を中心とした上道、中道、下道がつくられた。

古代では遠隔地の社寺に参詣するほどの経済的な余裕は貴族階級にしかなかったが、中世になると最初に武士が、後に庶民もこれに加わった。社寺による活発な布教活動に加えて、旅館や貨幣の普及などの条件が整備されたため、社寺参詣が広く普及したのである。とりわけ、九条兼実の日記であるd『【① 玉葉　② 吾妻鏡　③ 水鏡　④ 百練抄　⑤ 江記】』において語られたように、熊野信仰は盛況であった。

一般の農民が旅に出る機会を得るのは、領主の命令で年貢の輸送を担うときか、雑役として京都や奈良などに赴くときであった。鎌倉時代において、長距離輸送に車や馬を用いることはさほど普及しておらず、人が荷物を背負って運ぶ方法が一般的であったが、年貢のような重量物の運搬に適しているとは言い難かった。戦国時代には、馬による輸送が発達して、公用旅行者の便を図るために主な街道に設けられた宿駅周辺の農民に人馬を提供させた [5] 制度の充実をみるようになった。

鎌倉幕府では、京都六波羅と鎌倉の通信連絡を目的とした飛脚便を成立させており、沿道の守護の命令で荘園領主や御家人が人馬を負担した。室町幕府は、その権力が弱体であったために駅制を創出することができなかった。しかし、戦国大名は駅制を復活させて、分国内にそれぞれ独自の飛脚制度を成立させた。飛脚は、本城と支城、居城と戦場、そして居城と家臣らの連絡のために派遣され、政治的・軍事的に重要な使命を持っていたのであるが、広範な民衆が飛脚役の務めを果たすことで維持されていた。小田原に拠った戦国大名である後北条氏は、早雲の時代から飛脚を活躍させた。越後の長尾氏や豊後のe【① 毛利　② 少弐　③ 龍造寺　④ 大友　⑤ 相良】氏もまた、領民に飛脚役を課して分国内の通信連絡にあたらせた。

〔Ⅱ〕 以下の文章は、日本における儒教の受容史について記したものである。文章内におけるA～Eの【　　】に入る最も適切な語句を①～⑤から選び、マークしなさい。また、［　あ　］～［　お　］の中に入る最も適切な語句を記しなさい。

神祇信仰や仏教とならんで儒教は、わが国の思想・学問に大きな影響をあたえてきた。儒教とは、孔子を祖とする古代中国に発生した道徳・教理・祭祀の体系のことである。この体系は、中国を中心とする前近代の東アジアにおいて、長く文化的な共通基盤となった。

4～5世紀ごろには、日本に渡来する外国人が相次ぎ、彼らのもたらした文物や思想はその後の歴史に大きな影響をあたえた。そのうち、儒教の思想を記した『論語』は、A【① 王仁　② 弓月君　③ 阿知使主　④ 鞍作鳥　⑤ 司馬達等】(生没年未詳)によって伝えられたとされている。その後、書物や渡来人を媒介として儒教は徐々に広がり、7世紀の始めの成立とされる「十七条憲法」にも儒教の中心概念の強調がみられる。

律令国家が成立すると、学問機関としてB【① 中務省　② 式部省　③ 治部省　④ 文科省　⑤ 宮内省】の下に大学が置かれた。大学では儒教中心の学業が教授され、試験を通ると太政官に推薦される制度になっていた。とくに儒教を学ぶ学科は［　あ　］道とよばれ、のちに清原氏や中原氏などが［　あ　］博士を世襲するようになった。有力貴族のなかには、子弟たちを寄宿させ、大学での試験や講義をうけるのに便利なように大学別曹とよばれる付属機関を設立するものも現れた。大学別曹では、和気広世が設置した［　い　］などが有名である。しかし、律令制の形骸化や漢文学の隆盛とともに、やがて貴族の関心も儒教から離れて漢詩文などに向かってゆき、大学における教育も［　あ　］道が主流とはならなかった。

平安時代末から鎌倉時代になると、仏教や儒教の教えを易しく解くために作られた『実語教』といった書物も生まれるようになる。12世紀には、中国では南宋の朱熹によって朱子学が大成され、その影響は日本にも及んだ。朱子学の日本での受容は、まず禅僧がこれを学びはじめ、やがて神道家や博士家が参入した。そのため室町時代になると、五山僧のなかから儒教を修める者も現れた。入明後、

九州の菊池氏のもとなどで朱子学を講じ、のちに島津氏の庇護をうけ薩南学派を興した［　う　］(1427～1508)は、その代表的人物である。

江戸幕府が開かれると、徳川家康は藤原惺窩の弟子である林羅山を重用し、朱子学を文教政策の中心に据えた。藤原惺窩はもとは相国寺の僧侶であったが、彼に影響をあたえたC【① 李退渓　② 朱舜水　③ 李参平　④ 金忠善　⑤ 姜沆】(1567～1618)は、慶長の役で日本に拉致された朝鮮人儒学者であった。5代将軍綱吉は、林家の私塾を上野忍岡から湯島に移して聖堂学問所として整備し、林信篤を大学頭に任じて文教政策を主導させた。

多くの藩でも藩士の子弟のために儒教は率先して教えられ、全国に多くの藩校が設立された。米沢藩の藩校であるD【① 致道館　② 明徳館　③ 日新館　④ 明倫館　⑤ 興譲館】は、上杉治憲が細井平洲を招いて復興した。また、閑谷学校や花畠教場を設立したことで知られる岡山藩主の池田光政は、中江藤樹に学んだ［　え　］(1619～91)を招き、学問を修めた。

江戸時代になると、儒教にも様々な学派が派生してゆき、日本独自の展開が見られるようになった。中江藤樹や［　え　］に代表される陽明学派は、朱子学を批判して知行合一を説いたことで知られている。また、孔子・孟子の古説に立ち返ることを説いた古学派には、山鹿素行や伊藤仁斎・東涯父子などがいる。とくに山鹿素行は多くの著作を残したが、E『【① 聖教要録　② 本朝通鑑　③ 古史通　④ 中朝事実　⑤ 大学或問】』での朱子学批判が問題視され、赤穂への配流に処された。古学派のうち、とくに古文辞学派とよばれた人々のなかには、現実の幕藩政治の改革に積極的に携わり、経世論を説く者もいた。折衷学派であった広瀬淡窓は、豊後日田に桂林荘という私塾を建て、のちにこれを［　お　］という名に改めている。門弟は3000人以上を数え、高野長英や大村益次郎など、新たな時代を担う若者がここから巣立っていった。

〔Ⅲ〕 以下の文章は、近現代における企業スポーツ発展の経済的・社会的背景について記したものである。文章内における(a)〜(e)の【　　】に入る最も適切な語句を①〜⑤から選び、マークしなさい。また、 (1) 〜 (5) の中に入る最も適切な語句を記しなさい。

日本における近代スポーツの発展を支えた仕組みとして「企業スポーツ」(「実業団スポーツ」などとも呼ばれる)がある。企業スポーツとは、簡単に言えば企業の正社員による「運動部」である。都市対抗野球やラグビーのトップリーグ、バレーボールのVリーグ、元日に行われるニューイヤー駅伝など、有名な選手が出場し、しばしば多くの観客を集めたりテレビ中継されることもあってプロスポーツのようにもみえるが、ほとんどの選手は各チームの名前にある企業の正社員である。たとえば、ラグビートップリーグの強豪チームである「神戸製鋼コベルコスティーラーズ」は、基本的には神戸製鋼の正社員によって構成された「神戸製鋼ラグビー部」である。また、日本のオリンピック代表選手も、所属先の企業の正社員である場合が多く、競技引退後はその企業で定年まで雇用される。企業スポーツの本来の目的は、社員の健康増進やストレス解消、また社内の親睦をはかるためのレクリエーションであり、あるいはスポーツを通じて一定の規律や素養を学ばせるための社員教育であった。しかし、上記の大会に出ているような「企業スポーツ選手」は、しばしば所属企業の仕事はほとんどせずに競技に専念しており、その実態は各競技のトップアスリートの競技活動を支え、引退後のキャリアを保障する仕組みになっている。これは他の国にはほとんどみられない、日本独自の仕組みである。

日本における企業スポーツ発展の起源は、明治〜大正時代にかけて起こった産業革命と労働運動の勃興に遡る。1880年代前半の (1) 藩出身の大蔵卿松方正義によるデフレと増税策が農民を圧迫し、地租を払えなくなった自作農は農地を手放して都市部に流入した。この当時の地租は地価の (2) %であった。こうした人々はのちに賃金労働者となり、産業革命の基盤となった。一方で松方デフレの影響がおさまると、1880年代後半以降、華族などによる投資の活発化によって鉄道部門と繊維部門を中心に会社の設立が相次いだ。とくに日本の

産業革命初期の中心は繊維産業であり、綿糸を生産する紡績業では電灯を用いた昼夜2交代制と蒸気を動力にした紡績機の導入で生産性を向上させた。また、国産の繭を原料とした生糸を生産する製糸業は、外貨獲得の目玉商品となった。こうして日本は，1909年には(a)【① アメリカ ② 清国 ③ フランス ④ ロシア ⑤ イギリス】を抜いて世界最大の生糸輸出国となった。

製糸業と並んで重要産業として急成長したのは銅・石炭などの鉱業であった。石炭は工場の稼働用燃料や鉄道の発達による蒸気機関車の燃料としても需要が高まり、なかでも(b)【① 足尾 ② 別子 ③ 筑豊 ④ 夕張 ⑤ 三池】炭田では排水用の蒸気ポンプが導入され、国内最大の産炭地となった。一方、軍備拡張を急ぐ政府は、重工業の基礎となる鉄鋼の国産化をめざし、1897年には北九州に官営八幡製鉄所を設立した。

以上のような産業革命の一方で、賃金労働者の増加は社会運動としての労働運動を活発化させた。待遇改善や賃金引上げを要求する工場労働者のストライキが始まり、鉄工組合や日本鉄道矯正会などの労働組合が組織されるなど労働者が団結して資本家に対抗する動きが現れた。なかでも1886年、甲府 (3) 製糸工場で起こった女工ストライキは、日本最初のストライキとされる。こうした労働者側の動きに対し、企業の経営側もさまざまな対策を講じてきたが、職場対抗運動会や野球大会などのレクリエーションもその1つであった。たとえば、八幡製鉄所では1920年の激しいストライキを契機にレクリエーションとして野球が取り入れられるようになり、身分格差のあったホワイトカラーの職員とブルーカラーの職工が同じチームを編成し、双方の融和と意思の疎通を図った。この野球人気に目をつけた企業は、やがて工場や部署ごとだったチームから全社代表の選抜チームを結成して対外競技に参加させ、これを社を挙げて応援することで社員の帰属意識や一体感を高めるツールとして利用し始めた。北九州地方では1918年に九州鉄道管理局(1920年から門司鉄道局、現在のＪＲ九州)硬式野球部が、1926年には八幡製鉄硬式野球部が発足し、両チームの対戦は「製門戦」と呼ばれ、「西の早慶戦」と呼ばれた。このとき野球部にはチーム強化のための社員の採用枠と専用の野球場、選手には練習に専念するための特別待遇が与えられていた。なお、八幡製鉄所は製鉄大合同により1934年に半官半民の (4) 会社

となり、戦後の財閥解体の対象となる。

一方、明治後期～昭和初期は工場労働者の大半が繊維産業に従事しており、その大部分が女性であった。こうした女工の多くは小作農家などの子女たちで、苦しい家計負担を減らすための口減らしと家計収入を増やすための出稼ぎだったが、賃金の前借りや寄宿舎制度で工場に縛り付けられ、劣悪な労働環境のもと低賃金の長時間労働に従事していた。当時の女工たちの過酷な労働環境は [(5)] の書いた『女工哀史』に詳述されている。その他、1903年には(c)【① 農商務省　② 工部省　③ 内務省　④ 司法省　⑤ 大蔵省】が全国の工場労働者の実態報告をまとめた『職工事情』を刊行している。

一方で経営側からみると、逃亡や引き抜きによって女工の勤続年数は短く、その確保が大きな課題となっていた。そこで鉄鋼産業や鉄道産業の男性職工に対する野球と同様に、1920年代には大手の繊維工場において、女工を対象にしたレクリエーションとしてバレーボールが盛んに行われるようになった。バレーボールで野球のような対外競技が本格化するのは戦後になってからで、大日本紡績の貝塚工場に集められた精鋭による全社代表チームは、1961年のヨーロッパ遠征で22連勝して海外メディアから「東洋の魔女」と呼ばれた。「魔女」たちは1964年の東京オリンピックで金メダルを獲得し、ソ連との決勝戦の視聴率はスポーツ中継としては歴代1位の66.8％を記録した。大日本紡績は昭和戦前期(d)【① 大阪紡績　② 尼崎紡績　③ 摂津紡績　④ 三重紡績　⑤ 鐘淵紡績】会社、東洋紡績と並ぶ三大紡績会社の一つであった。

バレーボールやラグビーといった競技では、現在でも企業チームがトップリーグの中心を占めている。また、1964年の東京オリンピック以降は、オリンピック選手の5～6割が常に企業スポーツ選手である。しかし、こうした企業スポーツも、1990年代初頭の(e)【① リーマンショック　② アメリカ同時多発テロ　③ バブル経済の崩壊　④ 阪神・淡路大震災　⑤ 五十五年体制の崩壊】をきっかけに撤退する企業が相次いでおり、日本のアスリートを支える基盤が空洞化している。サッカーやバスケットボールのようなプロ化を検討する競技が増えているなど、日本の多くの競技がこれからのアスリートのキャリアを支える仕組みを再構築する必要に迫られている。

〔Ⅳ〕 以下の文章は、わが国における第二次世界大戦後の労働組合および労働運動について記したものである。文章内における(A)〜(E)の【　　】に入る最も適切な語句を①〜⑤から選びマークしなさい。また、［ア］〜［オ］の中に入る最も適切な語句を記しなさい。

日本政府は、1945年8月14日に、ポツダム宣言の受諾を連合国に通告した。そして、9月2日に、アメリカ戦艦ミズーリ号上にて、降伏文書の署名が行われた。それ以後、独立国として主権を回復する1952年4月28日の［ア］条約の発効まで、日本は、連合国の占領統治下に置かれるようになった。その統治の方法は、連合国軍最高司令官総司令部(ＧＨＱ/ＳＣＡＰ)の指令、勧告にもとづいて政策を日本政府が行う間接統治であった。

日本に対する初期の占領政策の主眼は、非軍事化と民主化であった。そのために、軍需工場などの戦争遂行能力を解体することで非軍事化を図った。これに加えて、経済の民主化が図られた。つまり、ＧＨＱは、支配的な立場を利用して富を独占していた財閥や寄生地主の存在、また労働運動への弾圧などが、軍国主義を助長させたと分析していた。そのため、労働者や農民が民主主義的な勢力として力をつけ、軍国主義への抵抗勢力になることによって非軍事化を進めるため、経済の民主化が図られた。こうした背景から、財閥解体、農地改革、労働改革などの民主化政策が行われた。

戦時中、弾圧を受けていた労働組合は、マッカーサーが(A)【① 芦田均　② 鈴木貫太郎　③ 幣原喜重郎　④ 鳩山一郎　⑤ 東久邇宮稔彦】首相(1872〜1951)に指示した、婦人(女性)参政権の付与、労働組合の結成の奨励、教育の民主化、秘密警察などの廃止、経済の民主化のいわゆる五大改革の指令を機に、大きな転換点を迎えた。

まず、1945年12月に労働組合法が制定された。警察官吏・消防職員・監獄勤務職員に対する例外があったものの、この労働組合法によって、団結権・団体交渉権・争議権の労働三権が認められるようになった。また、1946年には労働争議を解決するための労働関係調整法、1947年には労働基準法が制定された。この労働基準法により、1週間あたり［イ］時間の労働、女性・年少者の深夜

就業禁止など、労働条件の最低基準を定め労働者の労働条件を改善した。その結果、日本で最初の本格的な労働者保護法である1911年に公布された［　ウ　］は廃止された。

このように労働者の権利が保障され、労働組合の合法化が進むようになり、1946年に労働組合の全国組織として、右派の(B)【① 日本労働組合総連合会　② 日本労働組合総同盟　③ 日本労働組合総評議会　④ 全国労働組合総連合　⑤ 全日本労働組合会議】、左派の全日本産業別労働組合会議が組織された。また労働運動も活発化し、同年5月1日にはメーデーが復活し、5月19日には、皇居前広場にて飯米獲得人民大会いわゆる［　エ　］が開かれた。

また、こうした労働運動に拍車をかけたのがインフレの進行であった。1946年、インフレを抑制するために、預金の封鎖や新円の切り替えによって通貨量を減らす目的で［　オ　］を公布・施行した。しかし、その効果は長続きしなかった。また、経済の再生のために、石炭や鉄鋼などの基幹産業に資材と資金を集中させる傾斜生産方式を採用した。しかし、1947年に設立された日本政府の金融機関である(C)【① 日本政策金融公庫　② 国民金融公庫　③ 国際協力銀行　④ 復興金融金庫　⑤ 国際復興開発銀行】からの多額の融資が、大幅な財政支出を招き、インフレはさらに進行した。

こうしたインフレだけでなく、もともと食糧事情の悪化によって、国民の生活は困窮していた。そのため、農村への買い出しや闇市での取り引きによって人々は生活をしのいでいた。人々にとっては、生きて生活をしていくことが何よりも重要であった。こうした背景から、自らの生活をかけた労働運動は次第に高揚した。

しかし、1947年1月1日、吉田茂首相は、高揚する労働運動を年頭のラジオ演説で非難し、その指導者を「不逞の輩(ふていのやから)」とののしり、労働組合を一層刺激した。こうした流れから、全官公庁共同闘争委員会は、2月1日にゼネラルストライキを実行することを宣言した。このようなゼネラルストライキへの機運の高まりに対し、ＧＨＱは大きな社会的混乱を回避するため、最終的に、スト前日の1月31日に、マッカーサーによる中止命令を出した。その際、全官公庁共同闘争委員会の議長であった(D)【① 片山哲　② 松岡駒吉　③ 徳田球一　④ 有沢広巳　⑤ 伊井弥四郎】(1905～1971)は、ラジオを通じて「一歩退却、二歩前

進」との言葉とともに、ゼネラルストライキの中止を伝えた。

こうした背景から、これまで労働組合の活動を支持し、労働運動を容認してきたＧＨＱは、その立場を変えるようになった。そのため、日本の労働運動も後退するようになった。1948年7月、マッカーサー書簡にもとづき政令201号が出され、その後の法制化によって、公務員の争議権は剥奪されるようになった。また、1949年に起こった下山事件・三鷹事件・(E)【① 明石　② 石原　③ 松川　④ 八代　⑤ 若林】事件のいわゆる国鉄三大事件によって、労働運動は打撃を受けた。